

高島町白鬚神社所蔵の須恵器

関西学院大学考古学研究会

1. 経 過

関西学院大学考古学研究会が、1988年夏、滋賀県高島町に所在する白鬚神社古墳群を調査していた折、同町教育委員会の技師である白井忠雄氏より、白鬚神社に完形の須恵器が宝物として所蔵されているとのお話をうかがい、その後同神社側のご好意で実測の機会を得ることができた。

以下に紹介する須恵器4点はいずれも白鬚神社本殿の背後に位置する白鬚神社古墳群から出土したと伝えられている。しかし、これらの遺物の出土状況は明確でなく、安易に同古墳群の年代比定の資料として用いることは好ましくない。したがって、白鬚神社古墳群の調査報告とは別稿の形で紹介することとした。

2. 遺物（第1図）

須恵器は杯身二点、短頸壺1点、平瓶1点の計4点で、いずれも完形、あるいはほぼ完形である。

(1)は杯身で、口径は14.8cm、器高は3.3cmと低い。立ち上がりは厚く、直下に下がる形を呈する。端部は丸く、受け部は短い。底部はヘラ削りが、体部および内面全体にはロクロナデが施されている。内面中央部はさらに横ナデによって仕上げられている。胎土はやや荒く、焼成は良好。色調は淡灰色を呈する。全体に整形が不良で、粗品であるとの印象を受ける。

(2)の杯身は(1)よりも小型で、口径は10.2cm、器高は3.5cmを測る。立ち上がりは短く、内傾し、端部は丸くおさまる。受け部は外上方にのびているが短く、先端は丸い。底部は丸く、ヘラ削りが施されており、体部および内面はヘラ削りののち、ロクロナデによって仕上げられている。色調は灰色で、胎土、焼成ともに良好である。

(3)小型の短頸壺で、口径7.4cm、器高10.2cm、口縁は短く、直立し、端部は丸い。肩はやや張りをもち、二条のヘラ描き沈線を有する。底部は丸く、ヘラ削りが施されており、体部および内面は丁寧なロクロナデで仕上げられている。焼成は良好で、胎土はやや荒い。色調は灰色。なお、この短頸壺は肩部にヘラ記号を有する。

(4)は平瓶で、口縁部は漏斗状を呈する。内外面ともロクロナデを施し、端部は丸く、口縁部中央に沈線をめぐらす。器体はヘラ削りののち、体部上側3分の2にカキ目調整を行っている。全体に丸みをおびた器形で稜線を見ないが、底部はヘラ削りにより、平らに仕上げられている。体部上面には、2cm大の円形の粘土粒1個を貼付している。器高は13.6cmで、体部最大径は16cmを測る。胎土、焼成とも良好で、色調は暗灰色を呈する。

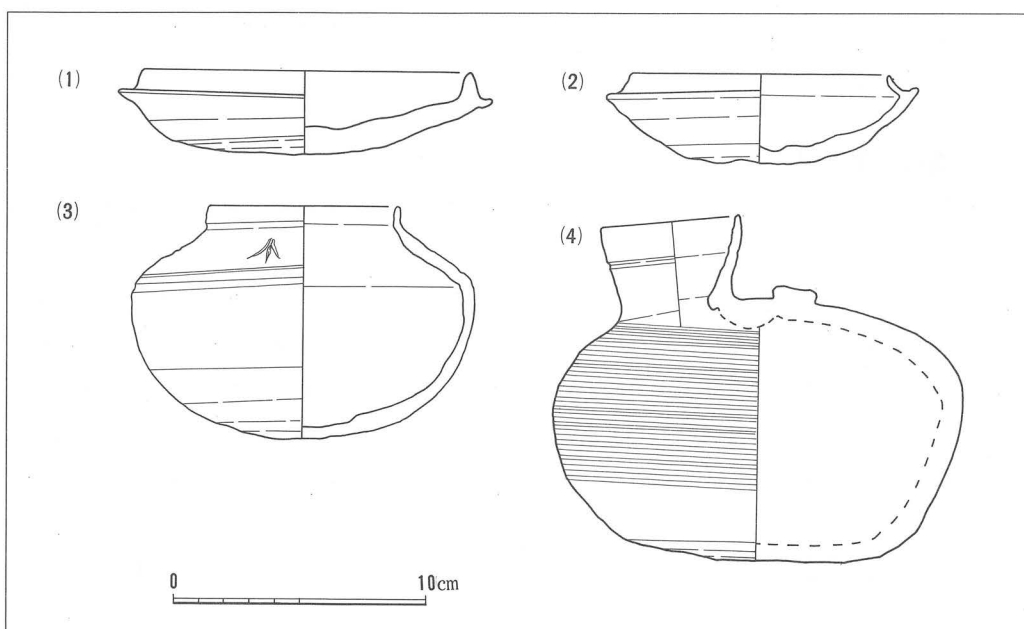
3. 小 結

以上の須恵器4点は、その形態から、6世紀後半～7世紀初頭のものと考えられる。^①(1)の杯身に関しては、やや古い可能性も考えられるが、他の遺物と比して大きく隔たるものではないと思われる。遺物は白鬚神社古墳群1号墳の推定年代とほぼ同一であるが、先述の通り出土状況が不明である以上、当古墳群の性格を論ずる際の資料として用いることはできない。しかし、周辺地域に存在する同時代遺跡からの出土遺物との比較などを通して、今後何らかの意味づけが与えられることが望ましい。

(石島)

< 註 >

① 中村浩『和泉陶邑窯の研究』(柏書房 1985年)による。



第1図 白鬚神社所蔵須恵器実測図